

# おぼろ

これはまだ尾道がいくつかの村の集まりだったころの、後に吉和と呼ばれる村で起こったお話。この村に面した海はあたりに名の知れた漁場で、一年を通して立派な魚がたくさん獲れていたそう。村の男たちは毎日陽がのぼる前から舟を出し、明るくなるころには魚をいっぱい積んで帰ってきたという。

平助はこの村に住む漁師の一人だった。しかし他の男たちが舟を魚でいっぱいにしてきても、平助の舟にはいつも少しの魚しか積まれていなかった。竿を出しても小魚ばかりが釣れて、たまに大きな獲物がかかってもすぐに逃げられてしまう。有名な漁村なだけに村の男たちは豪傑ぞろいだったものだから、平助はいつも自信がなさそうに身を縮めるばかりだった。

その日も平助は他の男たちと同じように、陽がのぼる前に舟を出した。

永田悠史

作画・面美憲

「ああ、またこいつじゃ」

ため息混じりの声をもらしながら、平助は釣り針から外した小魚を眺めた。もう陽はすいぶんと高くのぼっていたが、平助の足下ではそれと同じ魚が二、三匹、平べったい体を跳ねさせているだけだった。舟を出してから釣れているのはこればかりだ。

この魚は漁師たちの間では有名で、秋口から春先までの寒い季節によく獲れる。しかし小さくて平べったい見た目はみっともなく、身もあまり多くないために食べづらい。そのうえ腐りやすいために売り物にはならず、漁師たちには避けられている魚だった。

「おまえもわしと同じじゃなあ。村のやつらにはちつとも喜ばれん。いつも小さくなつてばかりじゃ」

平助は再びため息混じりの声をもらす。するとそれまであまり動かなかった小魚が体を震わせ、平助の手の中から跳ね上がった。

「あつ」

つかみ直す間もなく、小魚は平助の手からするりと抜け出して海へ飛び込んだ。小さなしぶきがあがったが、波打つ海面の上ではそれもすぐに消えてしまい、小魚の姿はあつという間に見えなくなった。

「はは、おまえも好きでわしに釣られたんじゃねえか」

平助は小魚が飛び込んだ海面をしばらく眺めていたが、肩を落としてそれだけ言うと、また釣り針に餌をつけ始めた。

「ああ、なんとかしてでええのを釣って帰らんと、またばかにされちまうなあ」

小魚ばかり釣れる海に、平助はまた釣り糸を垂らした。それでも竿はなかなか動かず、小さな舟の中はいつまでも広いまま。他の男たちなら帰っている時間もうに過ぎて、陽はどんどん傾いていった。



「……いかん、村はどっちじゃろう」

平助がようやく釣り糸を垂らすのをやめた時、陽はもう半分沈んでしまっていた。慌てて船を漕ぎ出したが、岸に着く前に辺りはすっかり暗くなってしまい、村の場所もわからない。相変わらず広いままの舟の上で、平助は途方に暮れてしまっていた。

「ん……？」

草木の生い茂った見慣れない場所ではあったが、平助の舟はどうにか岸に近づいてきていた。すると、なにやら聞きなれない音が響いてくる。波の音でも虫の鳴き声でもなく、もっと低音で、けれど獣のうなり声のような単調なものでもない。

なーわア　ぶーらぶらぶら

かーゼエ　ひーうひうひう

舟が岸に着くころ、それは歌になっていった。節は簡単なもので、途切れ途切れ。子供が戯

れに歌っているようなものだったが、確かに歌声だった。

「誰かおるんじゃろうか」

舟から伸ばした縄を近くの太い木の幹にくくりつけて固定し、平助はその歌の間こえる方へ歩いた。空きつ腹をおさえ、見通しの悪い森のような場所を、木のすき間を縫うように進んでいく。

くーだけ　とーんとんとん

あーぶれ　じーりじりじり

歌がより大きく響いてくると同時に、木のすき間からのぞいた先が少しずつ明るくなってきた。平助の足どりもだんだん早まってきた。

やがて開けた場所に出た。そこが森の切れ目であるように、土や石がむき出しになっていて木が生えていない。焚き火が燃えていて、なにやら香ばしい匂いが漂っていた。

しかし人の姿はなく、歌もいつの間にかやんでしまっている。平助はぐるりと辺りを見回した。

「なんじゃあ、人間か」

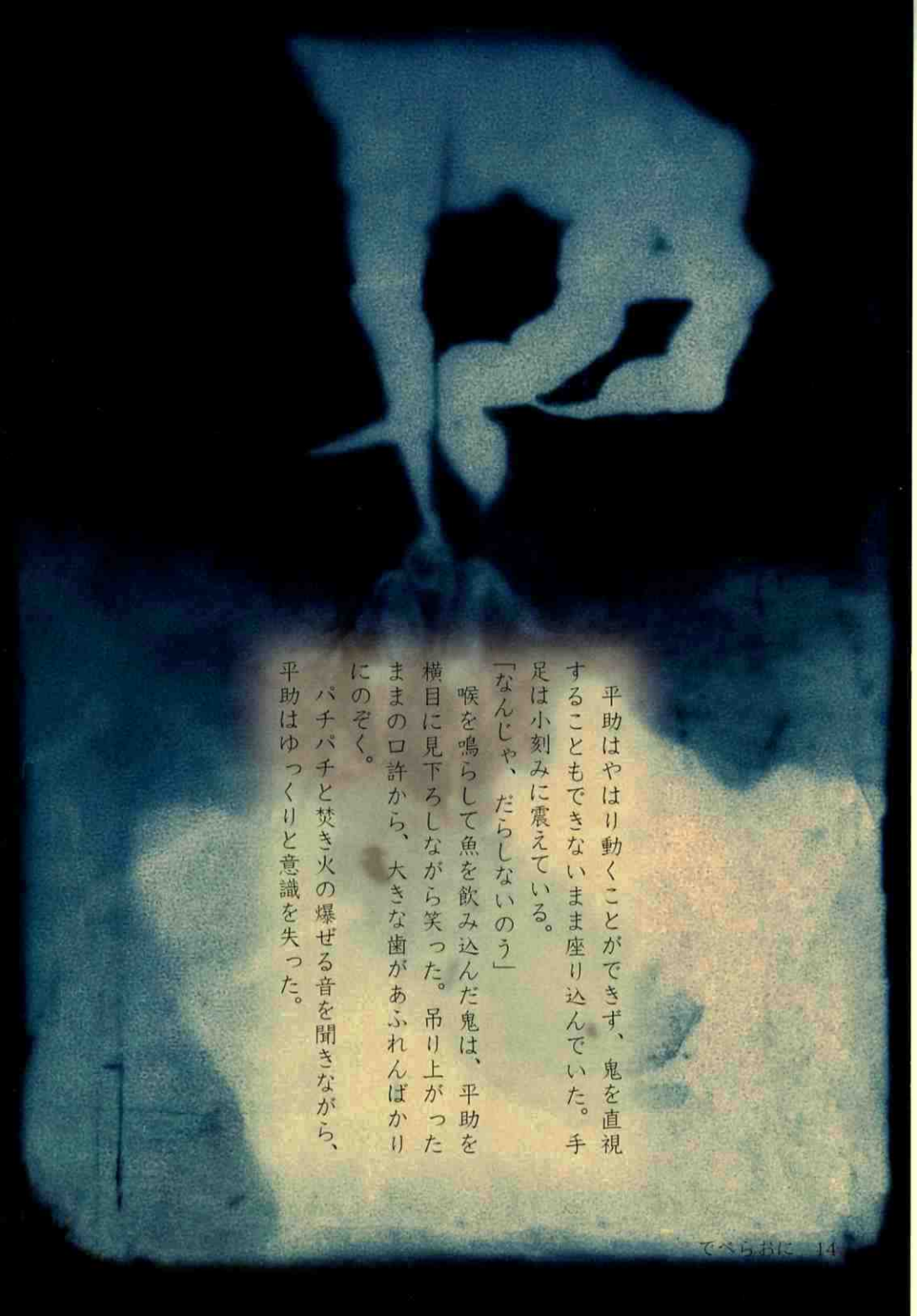
突然、頭の上から低い声が降り注ぎ、平助は弾かれたように振り返った。焚き火の光に照らされたそれは、背後に壁のように立っていた。肌が赤く見えるのは、焚き火のせいばかりではない。平助を見下ろしたその頭からは、太い角が二本突き出ている。

鬼の大きさの前では、平助の体は小さな子供のようなものだった。まともな悲鳴を上げることさえできず、ひゅつと息を呑むような声とともにしりもちをつき、平助はそのまま動けなくなってしまう。鬼の目玉がぎよろりと動き、その姿を眺める。

「ふん、運のええやつじゃ。今は人間よりうまいもんを持つとるけえ、食ってやる気にならん。どこへでも行けばええ」

腰を抜かした平助をしばらく見下ろした後、  
鬼は平助の頭の上を大股でまたいで通り過ぎ、  
焚き火の横に座った。それから大きな背中を  
丸め、太い指で何か小さな魚らしきものをつ  
まみ、その身を剥がして口に運ぶ。ギザギザ  
した歯でその身を噛みしめると、口許をぐいっ  
と吊り上げて鬼は笑った。口の中の身を食べ  
終わらないうちに、もう次の魚を火にかざし  
てあぶり始める。





平助はやはり動くことができず、鬼を直視することもできないまま座り込んでいた。手足は小刻みに震えている。

「なんじゃ、だらしないのう」

喉を鳴らして魚を飲み込んだ鬼は、平助を横目に見下ろしながら笑った。吊り上がったままの口許から、大きな歯があふれんばかりにのぞく。

パチパチと焚き火の爆せる音を聞きながら、平助はゆっくりと意識を失った。

それからどのくらい経ったのか、平助が目  
を覚ますと陽はかなり高くまでのぼっていた。

「夢、じゃったんかなあ」

あたりを見回しても鬼の姿はどこにもない。  
焚き火の跡だけが黒く残っていて、そばには  
小さな魚の骨が積まれて山になっている。そ  
の山の陰に、縄でくくられた小魚の干物の束  
が落ちていた。

「昨日の鬼が食つとつたもんじゃろうか」

手のひらにおさまるくらいに小さなそれは、  
そのままの形で干してあるようだが、開きに  
したように平べったい。それは昨日平助が釣  
り上げたものと同じ、あの小魚だった。

平助はそれをしばらく眺め、焚き木を拾い  
に森に入った。

「くーだけ、とーんとんとん。あーぶれ、じー  
りじりじり」

焚き火の前に鬼と同じように座った平助は、  
昨夜聞いた歌を口ずさんだ。平たい石でトン

トンと叩いて背骨を砕き、それを焚き火であ  
ぶっていく。

熱くなつた干物は頭の下あたりから身が少  
し持ち上がってきて、指で引っ張ってみると  
裂けるように骨から剥がれた。湯気の立ちの  
ほるその身をしばらく眺め、口へほおばる。


「……うめえ」

じんわりと口の中にしみわたっていく、ほ  
のかに甘い魚の味と熱。噛みしめるほどに広  
がっていくそれを、平助はじつくりと味わう。

「おまえ、こんなにうまい魚じゃったんか」

身を剥がしてはほおばり、ほおばってはま  
た剥がし。身がなくなつたら次の魚をあふる。  
束の干物はどんどん減っていく、あつという  
間になくなった。

それから平助は焚き火を消し、舟を繋いだ  
方へ向かつて歩いていった。背筋はまっすぐ  
に伸びて、その体は昨日より大きくなってい  
るようだった。



——という訳でして、その漁師が  
広めた干物がこのでべらなんだそう  
です。まあ、本当に鬼が作ってたか  
なんて、わかりませんけどね。

さて、どうでしょう。この話と一  
緒にでべらの方も、お土産におつ  
いかがです？

はい、ありがとうございます！

え？ こんな寒い時期に店先に吊  
るしておいて大丈夫なのか、ですっ  
て？ いやいや、冬場の冷たい風の  
ほうがでべらにはいいんですよ。

それに、もう節分でしょう。せっ  
かくだから、考案者にも味見しても  
らわなきゃ。

二月 某日